





東京文化財研究所は、独立行政法人国立文化財機構の組織の一つで、無形の文化財を含む文化遺産全般の調査研究、保存科学・修復技術に関する調査研究、文化遺産に関する国際協力を行う機関です。

平成12年（2000）に創刊したTOBUNKEN NEWSは、今号から判型も変え、紙面を刷新しました。より多くの方々に手に取っていただき、東京文化財研究所の活動を身近に感じていただける広報誌をめざしてまいります。

表紙解説 | 標津町におけるノリウツギの採取

和紙の主原料は楮などの繊維ですが、その繊維を紙にするためには、ネリと呼ばれる成分が必要不可欠です。掛軸の修復に用いられる宇陀紙にはアジサイ科のノリウツギという植物の樹皮の内皮がネリとして使われていますが、近年は入手が難しくなっていました。東京文化財研究所では、文化庁・北海道標津町と協力してノリウツギの安定供給に向けて調査研究を行っています。

（文化財情報資料部・江村知子）

目次

- 02 「アーカイブ増床・保存環境適正化事業」の取り組み：文化財研究のための資料を次代に引き継ぐために
- 04 調査研究の手法、保存継承の手段としての映像制作
- 06 科学調査によるキトラ古墳壁画十二支像（辰・巳・申）の確認
- 08 文化遺産を守る国際協力の仕事

COLUMN

- 10 逃るなり 紙魚の中にも 親よ子よ
- 10 わたしの調査道具 マグネット貼付メジャー
- 11 下田八幡神社の例大祭（太鼓祭）に行ってきました！
- 11 映画のなかのアジアの街・建築
第1回 密林のアンコール遺跡群
— 「トゥー・ブラザーズ」
- 13 活動報告
- 13 「東京文化財研究所文化財調査研究基金」
へのご寄附のお願い
- 14 資料閲覧室利用案内



「アーカイブ増床・保存環境適正化事業」の取り組み： 文化財研究のための資料を次代に引き継ぐために



みなさんのお宅では、本や写真をどのように保管しているでしょうか——。

東京文化財研究所の資料閲覧室は、文化財に関する本約40万冊、彫刻や絵画などの文化財を記録した写真約26万枚を保管しています。

これらの資料は、日本のみならず世界中の博物館や美術館の学芸員、大学の先生や学生など、文化財を調べる方々に、資料閲覧室での閲覧、ウェブサイトへのデジタルデータの閲覧、出版物への掲載、あるいは展覧会での展示のための貸出などで、幅広く利用していただいています。

将来にわたって、私たちがこのような文化財研究を支援する役割を担い続けるために、今年度、「アーカイブ増床・保存環境適正化事業」として、ふたつの課題の解決に取り組んでいます。

ひとつめの課題は、本や写真の保管スペースの確保（アーカイブ増床）。現在の庁舎ができた平成12（2000）年から23年が経過し、所蔵資料が充実していく一方で、書庫をはじめとした保管スペースが足りなくなっていました。これに対して、今まで使用していた固定式の本棚を、可動式のものに取り替えるなどにより、保管スペースを大幅に増やします。

もうひとつの課題は、保存環境を整備すること（＝保存環境適正化）。本や写真は、とてもデリケートで、極端な温湿度の変化があると、損傷が与えられる可能性があり、さらに、害虫やカビなどが発生します。その予防的措置として、除湿機や写真フィルム保管キャビネット、サーキュレーターなどを新たに設置、あるいは古い機器の取り替えをします。

これらの取り組みを通じて、今後30年程度は保管スペースの心配をすることなく、安定的に資料収集を継続できることになる見込みです。より多くの方々が貴重な資料を利用し、日本の文化財に関する知識を深める手助けができ、さらに、文化財研究のための資料を次代に引き継ぐことができればなによりです。

（文化財情報資料部・橘川英規）



可動式本棚の設置

この工事では、固定式本棚5本しか設置できなかったスペースに、可動式本棚9本を設置しています。



資料閲覧室に設置されている サーキュレーター

エアコンの吹出口や、空気溜まりができそうな空間に向けて吹き付けて、室内の温湿度を平準化します。



直接排水管に 排水するタイプの除湿機

タンク式排水だと1日半ほどで満水となって除湿機能が止まってしまうのですが、これならいつまでも除湿し続けられます。



（上）新設された可動式本棚

（左）写真フィルム保管キャビネット
フィルムフォルダに収められた写真フィルムは、保存箱に入れたうえで、保管キャビネットに配置しています。保管キャビネットは、低温低湿の写真原板庫に設置しています。

（右）天井の排水管に直接排水する タイプの除湿機

床下配管の状態で、床下に排水ができないスペースに導入しました。

調査研究の手法、 保存継承の手段としての 映像制作



鵜舟製作技術の撮影風景

長良川の鵜飼漁を行う舟（鵜舟）の製作について、船大工那須清一氏の指導のもと、アメリカ人と船研究者・船大工のダグラス・ブルックス氏が鵜舟を造船する様子を映像と文字で記録しました。

無形文化遺産部では、古典芸能や話芸、地域に伝わる祭り・行事や民俗芸能、伝統的な手わざや暮らしの中に息づく様々な技術など、形のない要素で構成された文化的所産を対象に、その保存や継承に資する調査研究を行っています。調査研究を行う際には、現在、継承されている様々な無形文化遺産のその時点での姿を記録する必要があります。

しかし、人々の行為が中心的な構成要素となるこれらの文化的所産を正確に捉えるためには、通常行われる、文字による記録のみでは限界があります。瞬間、瞬間の身体の動きや仕草を、多くの方に共有できるかたちで記述するのは大変難しいことです。そのため、当部では、音声や映像を用いた記録作成に関する研究も行っています。加えて、学術的な記録にとどまらず、無形文化遺産を担う人々・支える人々が無形文化遺産を保存・継承するにあたって有用な手法を開発することも、私たちの目標の一つです。

無形文化遺産部が作成した一部の映像記録は、無形文化遺産部のホームページで見ることができます。公開されている映像を視聴していただくと分かるとおり、文字情報（テロップ）の内容や表示のさせ方、撮影映像のアングル、編集の仕方が映像によって違っているため、視聴した際の印象も異なります。それは、各映像が、実際に映像を視聴し利用する対象者と作成の狙いに応じて、提示すべき情報を選択し、もっとも視聴者に伝わりやすいかたちとなるよう変種されているからに他なりません。今後は、これまで制作した映像記録を事例とし、様々な目的に応じ、より効果的に映像記録を作成するための考え方や方法論を、関係する方々に共有していきたいと思います。

（無形文化遺産部・後藤知美）



彫刻刀物製作技術の撮影風景

研究所内では各部で連携し文化財修理に使用する用具に関する調査を行っています。木彫りの文化財を修理する際になくてはならない彫刻鑿や彫刻刀製作の撮影風景です。



ブータンでの聞き取り調査

無形の聞き取り調査では、映像での記録も重要です。ブータンで芸能グループのメンバーに話を聞く際、床の上に置いた小さなカメラで、身ぶりなども含めて記録しています。

<https://www.tobunken.go.jp/ich/video/>

無形文化遺産部が作成した一部の映像記録は、無形文化遺産部のホームページ（上記URL、QRコード）よりご視聴いただけます。



科学調査によるキトラ古墳壁画十二支像 (辰・巳・申)の確認

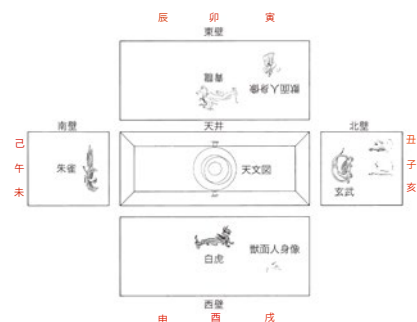
皆さんは7世紀後半から8世紀初頭にかけて、現在の奈良県明日香村に築造されたとされるキトラ古墳をご存じですか？石室の内側には、四神、十二支、天文図などの壁画が描かれていました〔図1〕。これらの壁画は取り外しが行われて、現在はキトラ古墳壁画体験館「四神の館」にて公開されています。

ところで、十二支像の中で辰・巳・申に該当する箇所は泥に覆われているので、本当に画像が描かれているのかを目で見て確認できません。これらの壁画片は和紙などで保護された状態で別置保管されています〔図2左〕。

主に東京文化財研究所と奈良文化財研究所の保存科学の研究者で構成されるチームは、これらの画像を「見る」ために色々な方法で挑んできました。平成30（2018）年にレントゲン撮影を行ったところ、ぼんやりと辰は見えたものの、巳と申を確認することはできませんでした。そこで令和3（2021）年にかけて、ハンドヘルド型（可搬型）蛍光X線分析装置を用いて分析を行ったところ、泥の下から水銀（Hg）を検出することができました。このことから、辰砂という赤色顔料の使用が示唆されました。

これを受けて私たちは令和5（2023）年2月に、最新技術を有した大型の蛍光X線分析装置を持ち込んで、元素マッピングによる調査を実施しました〔図3〕。その結果、〔図2中〕に見られるように、Hgの分布から画像を鮮明に確認することに成功しました。特に巳に関しては、コンピュータ上で舌先まで細かな画像が現れた時に、研究者からは驚きとともに大きな歓声が上がりました。一方で銅（Cu）に注目すると〔図2右〕、Hgよりも広がりを持った分布が得られましたが、その理由はまだわかっていません。今後も私たちは残された謎の解明に取り組んでいく予定です。

（保存科学研究センター・犬塚将英、紀芝蓮、倉島玲央、早川典子）



（図1）キトラ古墳壁画と十二支像の配置



（図3）泥に覆われた十二支像の調査風景

左
辰



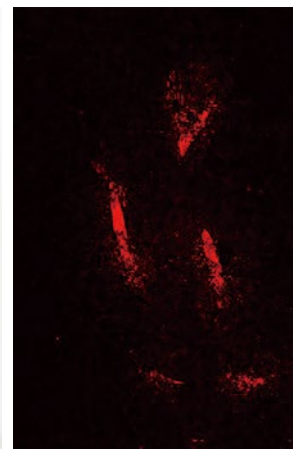
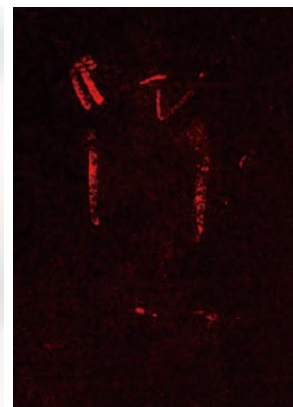
巳



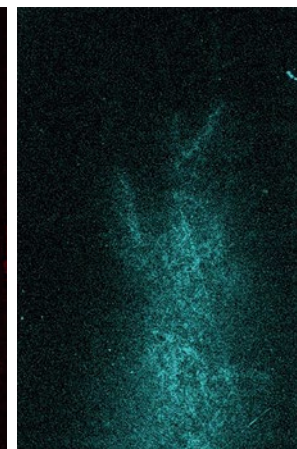
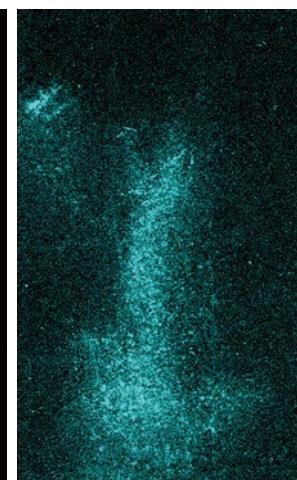
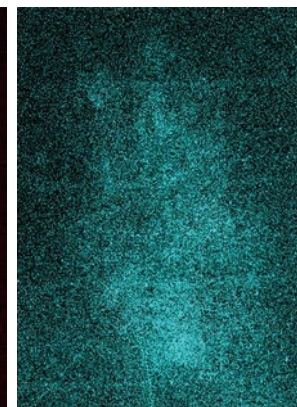
申



中



右



（図2）辰、巳、申の写真（左）、Hgの分布（中）、Cuの分布（右）

文化遺産を守る 国際協力の仕事

(上) ワーディー・アツ=サイル古墳群の
発掘調査 (バーレーン)
(下) アンコール・タネイ寺院遺跡
保存整備に関するカンボジア政府
アプサラ機構との協働



コロナ禍による制約が緩和され、久しぶりに海外旅行を計画している方もおられるでしょう。初めて訪れる地ならば尚更ですが、見たことのない風景、食べたことのない料理、聞いたことのない言葉、そうした非日常の只中に身を置くことで得られる刺激は旅の楽しみの大きな要素だと思います。そして、自分が属している文化は広く多様な世界のほんの一部分にすぎないことを実感させられるのではないのでしょうか。逆の視点に立てば、外部者にこそ見える文化の魅力や独自性というものもありそうです。

東京文化財研究所では、海外の文化遺産を保護するための技術支援や人材育成をはじめ、保護制度や保存修復技術の普及・発展に向けた協働など、日本の文化財保護への寄与も視野に入つつ、国際協力活動を幅広く展開しています。

「国際協力」という言葉からは、貧困地での生活改善や災害時の人道支援など、恵まれた側からする一方通行の援助といったイメージが浮かぶかもしれません。国際社会の一員として日本が果たすべき責任、といった大文字の理念があるのはもちろんですが、実際に現場で汗をかく人々を突き動かしているのは、いかに困難な状況の中にも息づいている生活と文化への共感ではないのでしょうか。

私たちも同じです。見知らぬ文化遺産と出会ったときの驚き、その魅力に導かれながら遺産に秘められた豊かな価値を引き出す一助となれたときの充実感、さらにはそうした価値を国や地域を超えて人々と共有する喜び。一人一人の専門性に応じて扱う対象やアプローチの仕方は様々に異なりますが、このような発見と共感のプロセスの中にこそ、この仕事に携わる醍醐味があると感じています。

(文化遺産国際協力センター・友田正彦)



(上) モントリオール美術館所蔵
屏風の修復 (カナダ)
(下) 文化財保護法令集刊行に
係るオランダ文化遺産庁での
聞き取り調査



ポンペイ遺跡『アポロの家』での
壁画保存修復風景 (イタリア)

COLUMN

逃るなり 紙魚の中にも 親よ子よ

～ニュウハクシミ、文化財害虫のこと～

大切な文化財が食べられてしまうかもしれません

私たちの大切な文化財に消えることのない傷を与える、厄介で憎むべき文化財害虫たち。最近、日本各地で発見されている新しい文化財害虫をひとつ紹介します。それは紙を食べるシミ（紙魚）の1種、ニュウハクシミ。とにかく繁殖能力がすごい。母親が単独で卵を産み、生まれてくる子はすべてメス。いわゆる単為生殖をします。卵1つでも侵入を許すと、あっという間にニュウハクシミだらけ、貴重な文書にかじり痕跡が!なんてことも。

そんな恐るべき存在とは裏腹に、透き通るように真っ白な姿、つぶらな瞳、そして親子でお茶目に動き回る様子がとても愛らしい生き物です。憎むべき存在なのにどうしても憎めない、そんなジレンマに苦しむ隠れファンも多い(?)文化財害虫です。

表題に添えた小林一茶の一句からもじわじわとシミ愛を感じます。さて、あなたはニュウハクシミを見て可愛いと思いますか？

(保存科学研究センター・佐藤嘉則)



※ 今回、題字の裏面には紙魚（シミ）による食害をイメージしたデザインを採用しています。
文化財害虫の食害により貴重な文字情報が失われてしまうことを、視覚的に感じていただけるのではないのでしょうか。

下田八幡神社の例大祭（太鼓祭） に行ってきました！

8月14日・15日、伊豆半島の南端、静岡県下田市に、下田八幡神社の例大祭を見に行ってきました。お祭りの見どころは、地域の若者たちが担ぎ、神輿の露払いを務める小型の輿を連ねて作る大きなアーチ!「太鼓橋」と呼ばれるこのアーチが見事に組みあがると、観覧する地元の方から大歓声があがっていました。ただし、今年の酷暑はお祭りをする方々には辛い気候だったようで…お祭りの最中、熱中症で具合が悪くなる方が続出し、来年度以降の課題となるようです。

(無形文化遺産部・後藤知美)



わたしの調査道具 マグネット貼付メジャー

江戸時代の絵画の研究を専門とする私は、作品調査で画家のサインを撮影するとき、あとで原寸拡大できるようメジャーを写し込みます。そこで活躍するのが、この道具。薄いマグネットにメジャーを貼った簡単なものですが、掛軸の表具の部分に当て、裏側からマグネットで挟むと磁力で位置が固定されます。さらにこのメジャーは、拡大写真を撮る際にも必須。メジャーの目盛りを写し込んでおけば、写真を同倍率で拡大し、絹などの材質を比較できます。一人の調査でも安心。私の調査には欠かせない相棒です。

(文化財情報資料部・安永拓世)



映画のなかのアジアの街・建築

第1回 密林のアンコール遺跡群

——「トゥー・ブラザーズ」

古今東西、映画に描かれてきた街や建築。ときに空想の建築物が主役となったり、ときに歴史上の街が再現されたり、世界遺産をバックに撮影された作品もあります。1920年代、植民地時代のカンボジアを舞台にトラの兄弟の別離と再会を描いた「トゥー・ブラザーズ」。迫力あるトラの映像、当時の生活の再現など、見どころが多くあるなか、密林に浮かびあがる、アンコール遺跡群の遠景が象徴的に描かれます。映像の一部は、アンコールから40kmほど東方のベン・メアレア寺院で実際に撮影されたそうです。監督のジャン＝ジャック・アノー氏は、火災にあったノートルダム大聖堂も2022年に映画化しています。画面に映る建築の物語もあわせてご覧ください。

[作品情報]

題名| トゥー・ブラザーズ

監督| ジャン＝ジャック・アノー

出演| ガイ・ピアース、フレディ・ハイモア、他

公開| 2004

(文化遺産国際協力センター・黒岩千尋)



撮影地のひとつであるベン・メアレア寺院

活動報告

東京文化財研究所のウェブサイトでは、主に研究員が執筆した活動報告を随時掲載しています。

文化財を守る調査研究活動の最先端をぜひチェックしてみてください。

<https://www.tobunken.go.jp/materials/katudo>



資料閲覧室利用案内



資料閲覧室は、調査研究、または学術・文化・教育事業のために当室資料を必要とする方にご利用いただけます。初回来室時には身分証明書をお持ち下さい。

また、学部生の方は、所属大学図書館の紹介状をお持ち下さい。

開室=毎週月・水・金曜日 10時～16時

休室=国民の祝日、夏期・年末年始

今後の状況により、開室日時を変更することがあります。

ご利用の際はウェブサイトで予約方法・最新情報をご確認ください。

<https://www.tobunken.go.jp/joho/japanese/library/library.html>



「東京文化財研究所文化財調査研究基金」へのご寄附のお願い

東京文化財研究所は、我が国の文化財の研究を、基礎的なものから先端的・実践的なものまで多様な手法により行い、成果を積極的に公表・活用するとともに、世界の文化財保護に関する国際的な研究交流を実施する国際協力の拠点としての役割を担っています。

そこで、文化財調査研究活動の充実を図るため、「文化財調査研究基金」を創設し、国民の皆様にご寄附をお願いしています。

基金の趣旨にご賛同いただける方は、国立文化財機構寄附ポータルサイト(<https://support-us.nich.go.jp/>)をご覧ください。

皆様の温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



香川県・妙法寺での作品調査の様子
(文化財情報資料部)



2022年に竣工した実演記録室（無形文化遺産部）



可搬型分析装置を用いた現地調査
(保存科学研究センター)



アンコール・タネイ寺院遺跡保存整備のための
現地調査（文化遺産国際協力センター）

